

静寂なる時空間への想い

三橋 寛治

最近気になって仕方がないことがある。それは最近の親殺し、子殺し、無差別殺人、誘拐・監禁などの事件が多すぎるということである。このような社会現象に接して「何かおかしいぞ」と誰もが感じているのではないだろうか。その原因については色々な専門家が解説している。しかし、一口で「これだ」というほど単純なものではないようだ。誰もが自分の経験に照らし合わせて考えることが出来るからであろう。

私も自分の経験から「これだ」と思うことがある。その思いが日増しに強くなっている。以下にそれを記し、皆様のご批判を仰ぎたい。

私は10代のほとんどを新潟県長岡市の郊外で過ごした。父が国鉄職員であったため全国を転々と移住したが、この長岡市での生活が最も長かった。辺り一面田畑が広がる中に20軒ほどの国鉄宿舎(社宅)があり、静けさがあたりを覆い尽くしていた。

自宅の裏には幅15メートルほどの信濃川の支流が流れていて、季節により水量が変化してまわりの田んぼに水を供給していた。その川の向こうは遙か彼方まで田園が広がり、遠くに山々が見え、その更に奥には高くそびえる北アルプスがかすかに見えた。自宅の窓を開けて「おーい」と叫ぶとしばらくして「おーい」と山彦が帰ってきた。夜の静けさは言うまでもない。長岡駅を出た列車が上越線と信越線の分かれるところまでくると決まって汽笛を鳴らしたが、遠くで響くこの汽笛が時報代わりの役目を果たしていた。音といえ、ほとんどは田んぼを亘ってくる風の音くらいで静けさが満ち満ちていた。

冬になるとその静けさはますます静けさを増した。雪は吸音性が高く声を出してもどこかに吸い込まれていくからである。11月末頃から雪が降り始め、12月中旬を過ぎると、春まで溶けることのない根雪(ねゆき)になった。あたりは一面雪化粧に覆われ、やがて屋根の高さまで積もった。夏になって電柱の4~5メートルの高さにつけてある道標印を見ると、冬の間歩いてきた高さを知ってびっくりする。大人たちは毎朝5時頃に起きて夜間に積もった雪を踏み固め、市内までの「道づくり」をした。踏み固められていない雪の中に足を突っ込むと胸のあたりまで落ち込むことがあり自力で這い上がることは難しい。一人で雪原を歩くのは危険である。登校時は上級生を先頭に皆一列になって歩いた。吹雪の時には前を歩く人から離れないようにしなければならない。前に行く人の足が上がったところに自分の足を置いて踏み外さないようにしないと足跡が一瞬の間に消えてしまう。1mほど前を歩く人影が吹雪でかすれて見えにくい。前を歩く人から少しでも離れると大変なことになる。「待って下さい!」と叫んでも前の人には聞こえない。雪は吸音性が高く吹き荒れる吹雪の音は大きく誰もが頭からマントを被っているせいもあり、自分の声はむなしくどこかに消えてしまう。あるとき、猛吹雪に遭って足を踏み外し、方向がわからなくなり夏なら15分で行けるところを約2時間もさまよっていたことがあった。

ところが、雪原では別の現象も起こる。前日に雨が降ったり気温が高くなって雪の表面が水っぽくなったあと、夜中に急冷すると雪の表面がアイスバーン状態となり、その翌朝はどこを歩いても雪の中に落ち込むことはない状態になる。これを「湿渡り(しめわたり)」と呼んでいたが、こういう状態になると誰もが自分の向かう方角に直線的に歩くことがで

き、田畑の中を自由に往来できた。しかし、それも午前中のうちで、雪表面が緩んでくると、野壺（のつぼ）に気を付けなければならない。野壺に落ち込めば終りである。しかし、静かで広い雪原のなかでの自由な空間は開放感に満ち満ちていた。

冬の体育の時間はスキーに当てられることがあった。吹雪のない日を選び1日中スキーを楽しむことができた。その当日は集合場所である山裾のスキー場まで自宅からスキーを履いて出かけた。雪原をスキーで進み、1つの村落を越えるとまた雪原のなかを進み、また村落が見えてきてそれを越えて集合場所に到着した。約1時間半かかった。そこで午後2時頃まで滑って遊び現地解散となる。各自は再びスキーを履いたまま自宅に向かった。友達とは次第にバラバラになり最後はひとりになった。吹雪のない晴れた雪原の中をスキーで進むほど楽しいものはない。疲れたら雪の中に寝ころんだり雪をほおぼって食べたりした。あたり一面白銀の世界のみで特別なものは何もなく、広い空間と静けさだけがいつも身の回りにあった。自分と話をする機会に恵まれていた。

父の転勤で姫路に移り、やがて神戸に住み着いたが、いまでも都会の人工的な音になじめない。騒々しく狭い空間がどうも苦手である。天井の低い喫茶店、近すぎる隣席からの人声、騒音に近い音楽、窓の外は自動車の流れ、どうもなじめない。

広い空間の静けさのなかで何か小さな音がするとその音は注意を引く。その理屈を利用して、他人の注意を引こうとするのが都市文化だろうか。他人の注意を引きつけるために他よりもっと大きな音、奇抜な音を出そうとする。TVのCMがその例に当たる。CMのときだけ出力を上げたりする。CMの時の画面の移り変わりの激しいこと。音だけでなく他を圧して自分の方に注意を引こうとする試みが次第に激しいものになっていく。都会は狭い、狭い空間での競争社会、奇抜な色調、騒々しさが増していくゆえんである。他人よりもっと奇抜なこと、抜きんでたことを追い求めていくうちに大学教授のデータねつ造論文まで発生するようになる。

生まれたときから騒々しい環境の中にいると自分と会話をする機会がないのではないかと私は想像する。それ故、冒頭で述べた最近のできごとの原因は「静寂性欠如の環境」が主因であると思っている。

「静寂性」が内なる世界を開いて落ち着かせるのに対して、「非静寂性」は外なる世界に気を向けさせる。静寂性はあまりにもか弱いので、その上に何か小さな音があるとすぐにそちらに注意が向かってしまう。外からの誘惑の方が大きい。多くの外からの誘惑同士が競い合う環境下では非静寂性は一層激しいものになり、極端な自己主張、支配欲やエゴの衝突が起こりやすく、次第に静寂性は閉ざされていく。静寂性が閉ざされた状態の騒々しい環境下で生活していると自分が何をやっているのか良く理解しないまま行動してしまう人間になっていくのではないかと危惧している。

知人のハワイ出身のM教授が「ここは自分の一番好きな場所だ」と言ってある場所を紹介してくれた。そこはオアフ島の北西海岸にあたる何の変哲もない場所だった。幅10mもないほどの砂浜とその後ろに雑木林があるだけで人気もなく、うち寄せる波の音だけが聞こえる静かな場所だった。そこで思索しているときが一番好きだというのである。また、早稲田大学のA教授は「ランスの大聖堂」（フランス）が大好きだそう。大聖堂のなかの「静寂な時間」ほどすばらしいものはない（毎日新聞）と言っている。

これらの人達は静寂性を求めてそれぞれの場所で自分と向き合う時空間を作り、それをなによりも大切にしている。内なる世界と外なる世界をバランス良く保てる環境づくりこそ、社会全体の健全性を保つために必要不可欠なことだと思っている。

神戸は港湾文化都市である。しかし長岡で体験したような静寂で広い空間を提供してくれる所はない。欧米の都市で見受けられる、無料で開放された大教会のような所もない。経済大国とは消費大国であり、なぜか忙しい。それは人混み大国であり、騒音大国、狭空間大国につながる。そこでは心を落ち着かせる思考の時空間を重要視する環境も育ちにくい。いま求められているもっとも大切なことは「静寂性のある時空間」を生活の中に取り戻すことであると思っている。皆様はどう思われますか。

以上